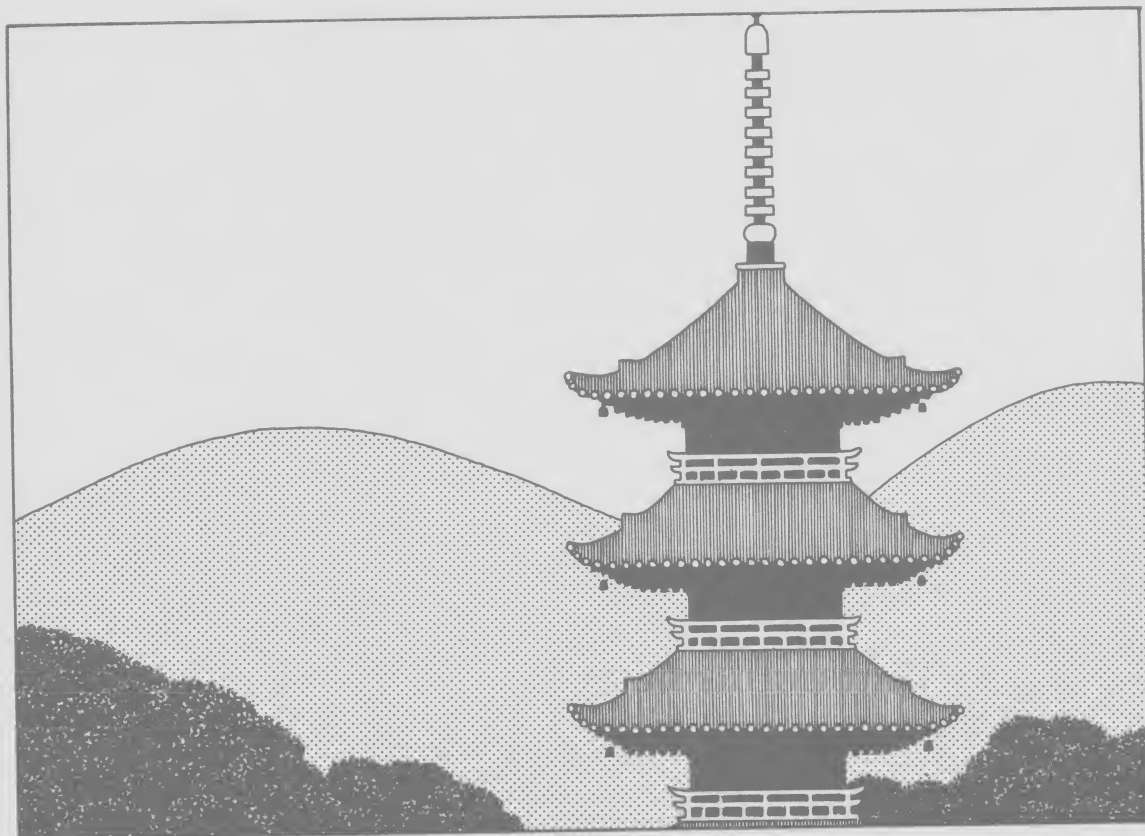
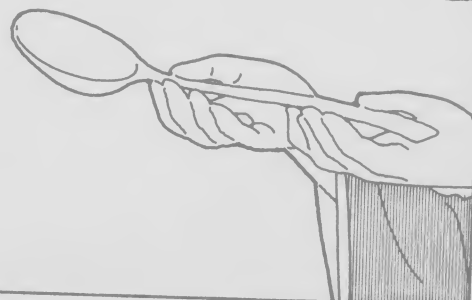
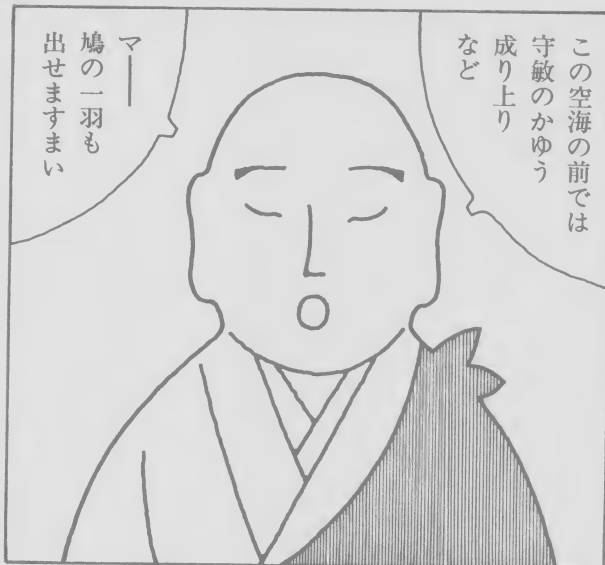
天長元年の夏、大内里の東南にある禁苑神泉苑には雨乞いの祈禱が地に響き水面を騒がせていた。長い間都の上空には雲ひとつなく日照りが続いた為、淳和天皇が唐帰りの空海に命じたものだった。

守敏（前編）

ひさうちみちお

桓武天皇は平安京を造営するにあたり、京の入口、羅城門の両脇に二つの寺を創建し、都を護らせようとした。その東側の寺、東寺を賜ったのが空海である。

西側の寺、西寺は守敏とゆう僧にまかされた。守敏は空海が唐にいた頃、天皇にゴマをすって急成長した男であった。

空海が唐にいる間に苦労して授かった密教を帰朝して天皇に献上した時も、天皇はそおゆうしんきくさいものに興味を示さなかった。「自分一人だけが唐の高僧より密教を授かった。わしは最澄より偉い」とゆう顔をしている空海に、天皇は守敏のしゃくし曲げの話をしたのである。

むかっときた空海は天皇の御前も忘れてかました。

天皇は自分の低次元を批判されてるようで甚だ面白くなかった。それで実際に守敏の法力を見れば空海も考え直すだろうと、一計を案じたのである。

と反省した空海だったが、後日、天皇に呼び出されて参内してみると

だだ一人密教の全てを持ち帰ったこの空海がなんで柱の陰に隠れんといかんのか

とゆうわけで再度守敏に対する怒りがメラメラと燃え上った時、何も知らない守敏が法力のネタを考えながら天皇の御前に上ったのであった。

得意気に火印を結ぶ守敏を見て空海は即座に水印を結び、これは二人の法力合戦となった。

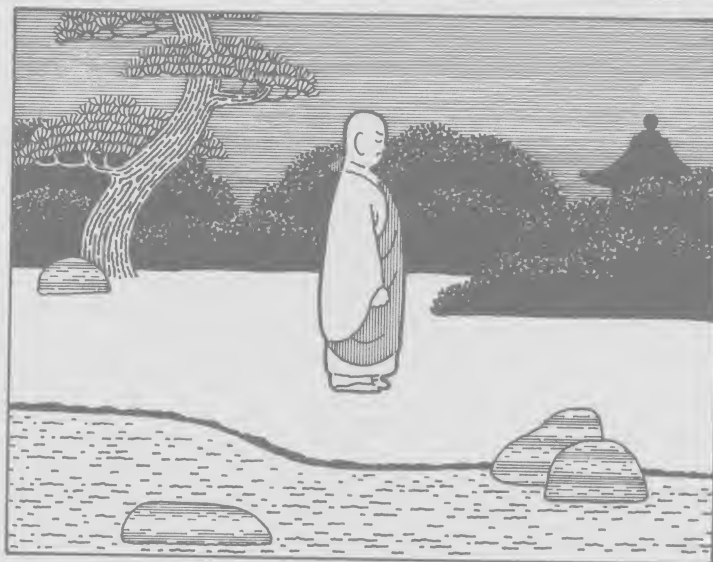
五秒たち十秒たったが水が湯になる気配すらない。どうしたことかと天皇の御前で油汗を流す守敏の前に空海が現れた。

ハーハーハー
こりゃ守敏
空海これに
ありとは
知らなんだか

まこと
星の光は
朝の日に消え
螢の火は
暁の月に
隠れるも
のよのお

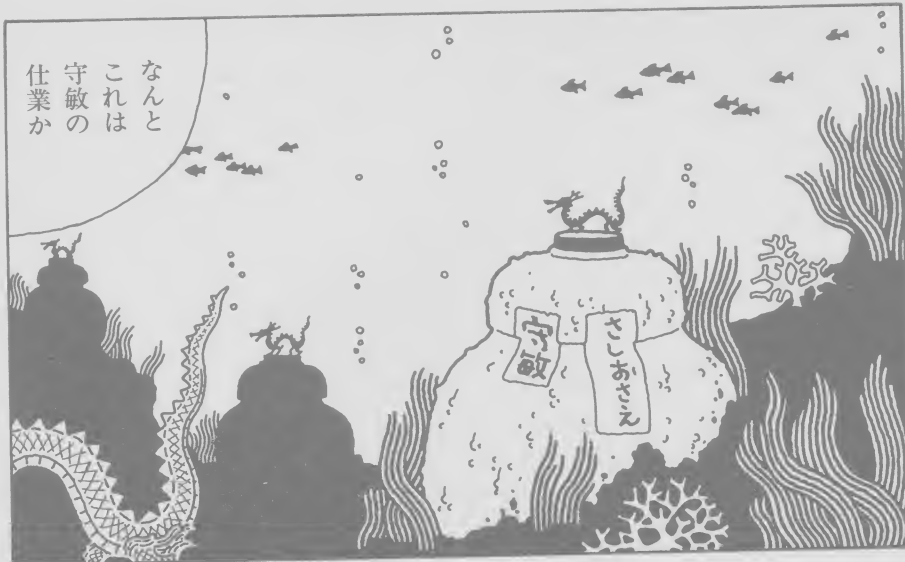
かくして天皇の顔に泥をぬった守敏のおぼえは地に落ち、彼は打倒されたのであった。そして月日は流れ貴族の噂にも守敏の名が聞かれなくなった頃、突然日照りが都を襲ったのである。

勅命により、空海が神泉苑にたてこもってから七日がたっても空には一片の雨雲さえ見えない。

彼は護摩壇を離れ静かに精神統一して、その力の出所をさぐろうとした。

空海の心眼の前に混沌の大きなモザイクは小さくなっていき、形を成して三千世が現れた。

なんと！雨をもたらす海の竜神達がおらぬ

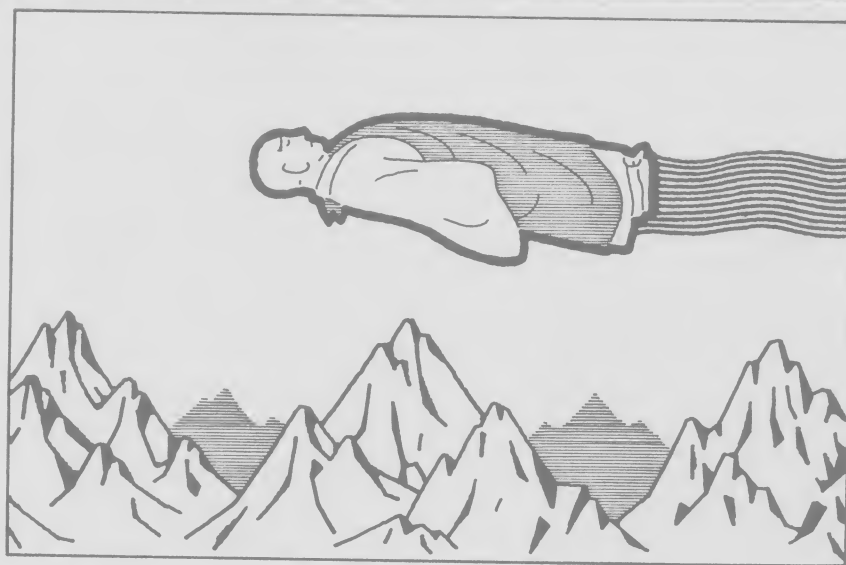
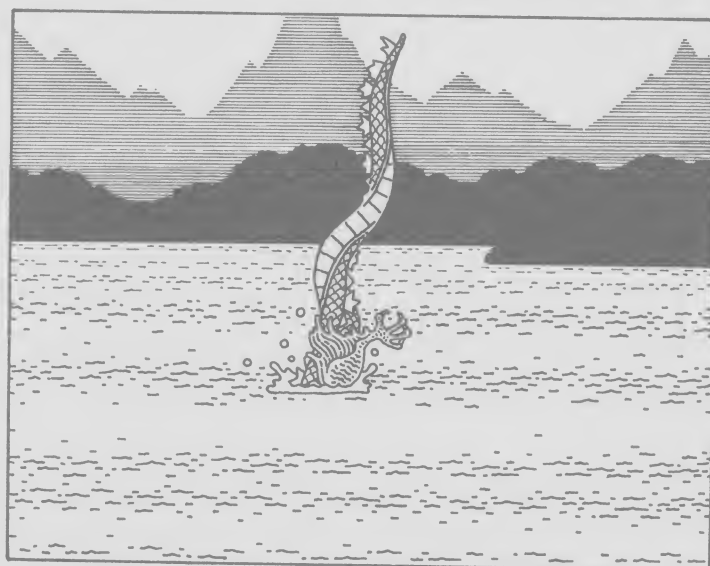
この鏡の如き水面はなんとしたことか

その理由を探ろうと、さらに海の中へ潜ってみると、海底の大きな水瓶の中に世界の海の竜神達がことごとく閉じ込められていた。

竜神が閉じ込められているとも知らず、七日間24時間体勢で空振りの雨乞いをし続けた空海には、人生を投げて暴走する守敏をおさえるほどのパワーは残っていなかった。さすがの空海もこれまでかと思った。

その時、空海の耳に低い正体不明の音が聴こえてきた。意識もぼやけてくる空海の頭の中で、その音はだんだんと大きくはっきりと聴こえるようになっていった。

これは
大日如来を
誦する
僧達の声か

いや
神泉苑の
周囲に群がって
水を乞う人々の
うめき声か

分らぬままにそれは誰一人聴いたこともないような大唱和となって、倒れている空海の体を持ち上げた。そして彼は海を渡り唐土を越えて天竺へと運ばれていったのである。

眼下には険しい大雪山が続き、その北に金色の波を水面に散らせる美しい池があった。その池の底深く潜ってゆく竜の姿を空海は見た。

竜がいた！　と思った瞬間空海は夜の闇におおいつくされた神泉苑に立っていた。

つづく